

市芦救援会通信

市芦救援会通信 通巻96号 99/3 <1部100円> 発行人 玉本 格
市芦救援会 〒659-0001 芦屋市剣谷9 市芦分会気付 TEL 0797(32)1131
市芦反彈圧闘争を支援する会 〒650-0022 神戸市中央区元町通5丁目3の16 テーラビル3F

公判日程 1999年5月27日(木) AM10:00 ~ 判決 (神戸地裁204号法廷)

「松本教育改革」から「市芦廃校」へ 教育行政の責任を放棄する芦屋市

市芦救援会事務局

去る二月一七日、芦屋市行政改革二カ年実施計画に関して、「市芦高校の統廃合検討」と各紙が報道し、生徒・親をはじめ、市民にも大きな不安と動揺が起こった。さっそく組合が市教委交渉を持った。「金がないから行革の対象で検討ということではない」との説明をしたが、しかし、「県教委の進める統廃合計画の中に市芦を含めてもらう」との市長部局の「見解」については擁護する姿勢をとっている。

一九八六年からの松本教育長の「教育改革」が、組合つぶしと生徒切り捨てでしかなかったことは、教員処分の背景として我々が明らかにしてきたことである。この一〇年余に生み出されたことは、大量の不合格者、大量の中途退学者であり、進路保障を教育の柱とした「市芦教育」がつぶされてきた。入学定員を一二〇名から八〇名に減員し、今春の入試でも二〇名もの生徒たちが不合格とされている。

芦屋市教委にとって、「松本教育改革」から「廃校」への道筋は、予定されたものであったとさえいえる。兵庫県教委のすすめる高校統廃合計画は、定時制高校つぶしが組み込まれており、県と同様に芦屋市にとって「市芦廃校」をしのばせる格好の口実でしかない。このような策動を許すわけにはいかない。生徒減少期に際して、「すべての子どもの後期中等教育を保障する」という立場こそ市教委に求められるべきものである。真の市芦再生をめざして原告らの現職復帰を早期に勝ち取りねばならない。今後とも一層のご支援をお願いするものです。

も／く／じ

統廃合は市長部局の越権行為 強権的な北村市政そのもの.....	市芦分会.....	2
行革の記者発表に関わる抗議及び要請.....	市芦分会.....	5
定時制高校という場をなくしてはならない.....	南 悟 (県立神戸工業高校).....	6

市芦分會時報 一九九九年三月一八日

統廃合は市長部局の越権行為 強権的な北村市政そのもの

市 芦 分 会

去る二月一七日(水)朝刊各紙に、市立芦屋高校が統廃合されることが決定されたかのように、芦屋市行政改革二カ年実施計画が掲載された。(資料①一九九九年二月一七日サンケイ新聞記事)

新聞を読んでびっくりした校長は職員朝会で「私も聞いていないので驚いている。市教委へ問い合わせたら今の時点ではそんなことはないと言っていた」と説明したが、教員と生徒に動揺は広まった。

我々組合は市教委とこの新聞記事をめぐって二度交渉をもった。その交渉経過を報告する。

我々組合は新聞記事が掲載された翌一八日(木)一八時より市教委(三栖教職員課長、竹内課長補佐)と交渉をもち、

「誰が会見したのか」
「市芦は改革路線ではないのか。教育改革を始めるとき、廃校の考えはないと明言していたのではないか」

「廃校をどうくい止めるかが課題ではない

のか」
「生徒の応募を一層減少させるのではないかと」
と市教委を追求した。

これに対して三栖教職員課長は、
「私も寝耳に水。記者発表は二月一六日に企画財政部長が行った。事務局内もどういうことかということ、企画部長から釈明があつたらしいがその内容については聞いていないので確かめてから報告する。行革大綱(見直し)に新規に『市芦のあり方について』の検討」が加えられ、行革実施二カ年計画にも盛り込まれている。これは、市教委の意向によるが、芦屋市(教育委員会も含めて)は市芦の教育改革が既定の方針であり、市芦の統廃合問題は一切検討されていない」と市教委の立場を弁明した。

我々組合は、
1 市長部局の釈明の中身を明らかにして欲しい。

2 親や生徒の不安をしつかり受け止めて欲しい。
の二点を一週間以内に責任ある立場の者が回答するように申し入れ、この日の交渉を終えた。

一週間後の二月二五日(木)市教委(山内管理部長、三栖教職員課長、竹内課長補佐)と第二回目の交渉を持った。発言はすべて市教委の責任ある立場として山内管理部長が行った。

冒頭に山内部長から、

「二月一五日に予算概要が発表された。不況と震災の影響が大きいこと、その一方で政府が行革推進を指針として出している。行革は必要である。行革とは削減だけでなく、見直すことによってサービスの向上や内容の充実を図ることである。一六日に行政改革の概要を企画財政部長が中心となつて記者会見で説明した。行革大綱、実施二カ年計画の中には『市芦高校のあり方の見直し』と書かれているだけである。九六年から九八年の実施三カ年計画にも『市芦高校問題』は入っていた。ただし、これは教員数の見直しという点であつた。二〇〇五年までの復興計画では多額の予算不足が見込まれている。そのため、引き続き九九年、二〇〇〇年の二カ年計画を策定する必要がある。福祉と教育ははずせという意

見もあり、国では教育については別の計画を策定しようとしているが、芦屋市は例外なく全てを行革の対象として一本の計画で取り組む。他方、国も教育改革、県の高校統廃合計画もあるので、それらを考慮しながら市芦高校のあり方を考える必要がある。
一〇年後には生徒数が現在の三割減になると県では予測している。全日制高校長期構想検討委員会もつくられ、高校の個性化・多様化などいわれている。また、西高校の単位制高校化もある。それらを総合的に考慮して『市芦高校のあり方』を検討していく。なお、市芦高校のあり方はお金のためだけに検討していくのではない。」という説明があり、その後具体的なやり取りを行った。

組合員を復帰させ市芦の再生を

組合 「記者会見は誰が行ったのか」

山内 「記者会見は助役と企画財政部長らで行った。主に部長が対応した。市教委からは管理部長が出席できなかったため総務課長が出席した。市としてどうするかを決めたわけではない。入り口の手前。周辺の変化を考えるといくために行革大綱に入れた。市として県の計画に乗っかるというこ

とをとらえて記事になっている。検討方法すら決まっていらない。検討方法が決まれば発表する。検討方法については教育委員会が決める」

組合 「にもかかわらず、記者会見で市芦の廃校の可能性を表明するのは越権行為ではないのか。また、検討方法についても発表前に組合を含む多方面から意見を求めるべきではないのか。学校のあり方についても組合から意見を聞いて市芦の再生を図るべきではないのか。廃校は教員身分に關わる重大な問題だ」

山内 「廃校となつたらおことである。組合にも説明し理解を求める。教職員の処遇の問題もでてくるから組合とは話をさせてもらう。記事は間違っていない。誇張はあるが。誤解を招いたのは事実である。二月一七日の教頭会でそんなことはない」と説明し、校長会、市芦の校長とPTA役員にも説明した。卒業生やいろいろな方面から問い合わせが殺到したが、市芦のあり方は金のために検討しているのではない。市芦をどうするかが先にあって、金の問題はその後に付いてくる問題だ」

組合 「市長部局からの釈明の中身は」

山内 「市長部局からは『言葉足らずだった』釈明があつた。困ると申し入れて申し訳ないと返答を得た。困るのはそこまでいっていないのに載っているから」

組合 「過去二回の学教審答申をどう評価しているのか」

山内 「過去二回の学教審答申は徐々に成果はでていく」

組合 「予算不足という中で市芦のあり方という廃校になるのではないのか」

山内 「廃校と決めているととらないで下さい。行革は削減だけでなく充実させてサービスの向上も含む。今は市芦を良くすることだけを考えている。皆さんも協力して欲しい」

組合 「組合員を排除してよく言う。協力するために戻せ」

というやりとりを行ったあと我々組合は、「実体を無視した教育改革であり、市芦を廃校へと追い込むものであると批判し続けてきた。もし廃校になれば全責任は教育委員会にある。市芦の再生と存続に全力を挙げるべきである。組合は一貫して市芦高校を市民の子弟のための学校にすることを主張してきた。市芦を良くすることを誰よりも願っている。」

現在の教育問題で、学校数と生徒数という枠の問題だけで片づかない『不登校児の問題』『いじめの問題』などに積極的に取り組む特徴ある学校として再生させる努力をして行くべきである。その点において組合は協力を惜しまないと言いつけている。我々を復帰させて再生を図れ」

と主張し、この日の交渉を終えた。

さらに三月三日（水）に我々は「行革の記者発表に関わる抗議及び要請」を市教委に申し入れた。

今回の記者発表は市教委にとってはまだ「入り口の手前の問題」であるのに、「統廃合」という言葉であったかも出口の問題で

あるかのように説明した市長部局による教育の独立性を犯す越権行為である。ここに北村市政の本性が見てとれる。

教育を政争の具にさせてはならない。

市民の子弟の後期中等教育の完全保障をめざして我々は闘うぞ。

財政難の芦屋市

市立高校も行革対象に

統廃合 県教委計画を視野

99年2月17日サンケイ新聞記事

震災後の財政難に苦しむ芦屋市は十六日、市立芦屋高校（同市剣谷）を県立高校の統廃合計画に加えるよう県教委に求めるなど、将来のあり方をめぐって見直しを進める方針を明らかにした。復興事業による財政危機が続くなか、財源を設けない大胆なスリム化の姿勢を示したわけだが、学校の存廃問題が絡むだけに大きな論議を呼びそつた。

同市は來年度からの三年間で総額九十九億圓を削減目標に掲げ、ユースホステル休止、敬老祝い金の見直しなど三十二項目を新たな行革の検討項目とした。

市内唯一の市立高校である同校をめぐる動きもこの一環。「進学の門戸開放」

市での市立高校建設を認めてきた、十万人以下の都市では文部省を押し切つて昭和三十七年に開校したが、当時は計三校しかなかった。同市内の全自治体高校は五校に増加。少子化などで同校は定員割れが目立ち、平成九年度からは募集人員を百

今回はさらに年間五億円近い同校への支出削減を急遽に置いておき、県教委が進める統廃合計画に同校を含めてもらうことを視野に入れてゐる。

興業委高校教員会は、市立と県立では教職員の採用が別など、難しい面があるが、話があれば協議をして計画を進めたい。学区の在り方も検討することになるのでは」と話し、市の出方が注目される。

一九九九年三月三日

行革の記者発表に關わる抗議及び要請

芦屋市立高等学校教職員組合

執行委員長 森村 啓一

一九九九年二月一六日、助役、企画財政部長、市教委総務課長等出席の下、芦屋市当局は記者会見し、新年度当初予算案と行政改革二カ年実施計画を発表した。

その内容は翌二月一七日の朝刊各紙に掲載されたが、「市芦屋高の統廃合検討」(読売新聞)や「市立高校も行革対象に」(統廃

合 県教委計画を視野）（サンケイ新聞）などのセンセーショナルな見出しで始まる記事は当の市芦関係者のみならず市民、とりわけ受験生とその保護者に大きな不安を与えた。

また、貴職が組合と話し合いすらせずに、いきなり公表したことにより、市立芦屋高校の生徒と教員をはじめとして多くの人に不安と動揺を与えた責任は重大である。

「県教委が進める統廃合計画に同校を含めてもらうことを視野に入れている」（サンケイ新聞）などという記事は会見した者が説明しないと新聞記者にわかるはずのものでないことは一目瞭然である。

し、「市教委としては今も市芦をいい学校にしていきたいと考えている」と明言し、「二回目の学教審答申も徐々に成果は出ている」とさえ述べている。

しかし、新聞記事に「統廃合」という言葉が出たのは「結果的に選択肢の一つとしてはあるので」と市長部局を擁護する立場さえのぞかせた。

市立芦屋高校では、校長が当日の職員朝会で「私も聞いていないので驚いている。市教委へ問い合わせをしたら、今の時点でありえないと言われた」とひたすら平靜を装うよう説明したが、新聞を読んだ生徒が教員に不安を訴えたり、教員の間にも動揺が起こっている。

二月一八日と二五日にこれらの点を踏まえて、市教委の責任ある立場の管理部長から我々組合に対して、新聞記事に関する市教委の事情説明を受けた。「誤解をまねいたのは事実」であり、市長部局に釈明を求めたというがその内容たるや、我々を十分に納得させるものではない。

市教委にとつてはまだ「入口の手前の問題」を、「統廃合」という言葉で「出口の問題」であるかのように説明した市長部局は、北村市政の本性を露呈したものである。教育の独立性を犯す越権行為そのものである。

なぜなら松本教育長の下で一九八六年九月より始めた「教育改革」は「市芦つぶし」を企図したものであり、多大な被害を生徒と教員に与えたもので、およそ教育改革といえるものではなく、我々は終始反対してきた。特に市教委のいう「改革路線」が廃校路線につながるのと危惧を表明してきた。

また管理部長は「行政改革二カ年実施計画」の中の「市立高等学校のあり方」、「国
の教育改革や県立高等学校の状況等を勘案
し、将来のあり方を検討する」について、
「市教委としては検討課題として項目をあ
げただけである。どんなふうにするかはま
だ入口の手前の状態である。検討の方法も
まだ考えていない」と市教委の立場を強調
した。

「統廃合」という言葉が新聞の活字になった時、「廃校」とった市民は多い。管理部長も「廃校となったら大ごとである。組合にも説明して理解を求め、教職員の処遇の問題も出てくるから組合とは話をさせてもらう。今後の推移を見てほしい」と約束したが、市民に対する市教委の説明責任は残されたままである。

貴職が「改革路線」の失敗を認めず、廃校路線へと傾斜していくことは地域の子どもたちの後期中等教育を保障すべき教育行政の責任を放棄するものである。

同時に管理部長は「金がないからというので検討課題にしたのではない。教育のあり方を考えることがまず先である」と説明

我々は貴職に対して、この説明責任を果たすことを始まりとして、いたずらに少子化を口実とする単なる数合わせではなく、教育の困難に立ち向かっている子ども、親、教員を支援し、市民の子弟の後期中等教育の完全保障をめざすことを強く要求する。

定時制高校という場をなくしてはならない

(雑誌「世界」九九年二月号より)

南 悟 (県立神戸工業高校教員)

再生の場を求めて

「よろしい。しずかにしろ。申しわたした。このなかで、いちばんえらくなくて、ばかりで、めちやくちやで、てんでなつていなくて、あたまのつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ」

宮沢賢治「どんぐりと山猫」

勉強ができない、柄がわるい、不良、最低、だめ人間、といったような烙印を押され、自暴自棄になりながらも夜間定時制高校に辿り着いた生徒たち。こうした彼らも定時制高校の場では自分への自信と誇りを取り戻すのです。

定時制高校は人間再生の場です。人間としての誇りや矜持を取り戻せる学びの場です。たとえ、どのような失敗や挫折や障害があるにせよ、それが癒され、人として生きる力が与えられる不思議な学校なのです。

世間の目立たないところで、毎日、汗と油とほこりにまみれ、若い体をすり減らして働

いている彼らを見ると、そのように思えてなりません。

一方で、あの未曾有の阪神・淡路大震災を経ての、学校不適応や家庭崩壊、生活困難から来る子供たちの荒れは深刻です。その荒れはシンナー吸引であったり暴力事件であったり、また深夜徘徊や暴走行為や窃盗事件となつて現れているのです。震災後、これらの少年事件が神戸市においては震災前に比して倍増どころか場合によっては三倍にも上るという事実は見逃せませんし、すぐれて学校教育の課題でもあるはずです。

仕事の歌

荒れた中学校生活を送り、夜間定時制高校に来て自分を取り戻しつつある生徒たちが、仕事の苦楽を短歌に詠んでいます。いずれも一年生で一五歳の少年たちです。昼の学校では得ることのできない価値が、働き学ぶという営みの中に見いだせるようです。

俺は今大工の華咲く一五歳

足場に上り破風板を打つ
作業着の汚れ気にせず働くが

「汚れ落ちへん」おかんが怒る
潮風の匂う運河の貯木場

藻に足取られ海中ドッポーン
作業服ドロドロ汚して一カ月

給料もらいみんなでカラオケ
ワイヤーを手で編む作業指切れて

うまくならないアイスブライス
足場にて可愛い娘見とれ踏みはずし

番線からまりニツカが破れ
鉄鋼所僕の仕事はフライス盤

仕上げのけずり幅五〇ミリ
やりました仕事見つかり嬉しいなあ

トンカツ屋さん給料ほしい
トンカチで釘打つ仕事の最中に

自分の手たたき皮がめくれる
柄杓持ちアルミを入れて湯口へと

部品が熱く軍手も焼ける

不登校だった少女のこと

少ししか通えなかった学校に

楽しみながら今通っている

木 純子

中学校は不登校のためにほとんどいかなかった生徒です。寡黙で物静かな少女ですが、定時制高校では入学以来一日も休んでいません。それも、初めて働き始めた卸売市場の海産物店の仕事との両立をけなげにこなしてきました。

入学後二カ月の作文にこの様に書いています。

「...学校へあまり行っていないかった者が、急に仕事、学校とうまく両立できるか、すごく不安でした。でも、仕事も、楽しいし、学校はもつと楽しい。今まで、学校をどうやって休もうかと頭をズルがしく使っていました。今では、休むのもつたいないと、思うようになってます。休むのがこわいと感じるほどです」

入ったばかりの学校をこのように見ていることがうれしくて私はこの作文を職員会議でも、全校生徒集会でも紹介しました。職員も生徒も同じような気持ちで受け止めることができました。

須磨区のA少年に触れて

鋼管を足場の上に運ぶとき

彼女の笑顔思つて微笑む

森 真一郎

落第して二度目の一年生です。入学した当時はなかなか授業に入らず、いつも校門周辺で中学時代の仲間大勢でタバコを吸ったりバイクを乗り回したり爆竹を鳴らして騒ぐなど、手を焼いた生徒の一人です。シンナーもなかなかやめられなかったような生活でした。教室に入るよう促すと、「うるさい、おっさんしばいたるか、あつちへ行つておけ」と言うような始末で、こうした状態が長く続きました。

担任が繰り返し家庭訪問をし、就職を世話してかわる中からようやく教室の席に座る癖が付きました。中学時代のことに触れると「勉強なんかせんでよかったしおもしろかった」というのです。聞くと震災の混乱以来、彼の場合ほとんど学校生活が成立していなかったようです。

二度目の一年生の秋に初めての歌を作りました。「おれはみんなと違う仕事の歌を作る」と驚愕人として働く中から彼女も詠み込みました。

そんな彼が、ある日の授業でA少年に触れ、「あんなやつ、定時制高校に入れて鍛えてやったらいいんや、ここやつたら立ち直る」としみじみ言うのです。だれもがあの事件(須磨区の少年殺害事件)には触れにくかった頃のことです。おそらく自分の身に置き換えての発言だったのでしょう。優しい表情の彼が忘れられません。

学校は収容所だった

また、今春入学した松山君が、自身の生い立ちを記した作文の中や話の中でA少年について触れている内容も、深く考えさせられるものです。

松山君は小学校四年時に大型トラックにひかれて左足を失って以来、松葉杖の生活です。「左足をなくした結果故の、つらい思いは、数え切れないほどしてきた」と言う彼の小・中学校の生活は、生徒や教師からのいじめの連続であったといえます。学校は「収容所」であつたと記す彼は、「中学校の卒業式では、教師から受けた侮辱を晴らすために、どうすれば仕返しすることができるとかということばかり考えていた」と言うのです。そして、「けど、A少年は敵を間違えたんや、怒りを弱い子に向けずに学校や教師に向けるべきやつたんや」と怒りに震えこぼしを握りし

ほんの数名の生徒を紹介したにすぎませんが、夜間定時制高校には、人間が生きている豊かなドラマがあります。傷つき挫折して来

定時制高校つづきの波

どこへ行っても涙でありがとう
ジャッキアップ家持ち上がりホッとする

この作業に関わる上野君たちのすごい点は、建築士一人が中心になり、ボランティアの若者たちが仕事を請け負っていることです。このために、ふつう一軒の相場は三百万円程ですが、その三分の一から四分の一の値段でこなしているとのこと、困っている人に喜んでもらえるのが嬉しい」と、その日の出来事をいつも笑顔で語ってくれる二十歳の青年です。

次の歌も詠みました。

て使われる家が多数あります。
ジャッキアップの作業工程は、例えば二階建木造家屋で次のようです。手動の一〇トンジャッキ五本、五トン用五本、小さな二トン用を一五本程使い、四〇五人の作業員がかかって一週間ほどの日程です。もちろん、ミリ単位で徐々に持ち上げるのですが、多くは土台の材木が腐食しており、新しい木材をあてがう手間が一番大変です。

めていました。

こうした彼の傷つく魂は、定時制高校に入って、担任が「彼の存在が受け入れられ表情がやわらいできた」と言うように、癒されはじめるのです。

「数学の先生に呼ばれて嫌々職員室に行った。ところがその先生は、『おう、よう来たなあ』とまるで何年かぶりに会う親友のように出迎えてくれたのだ。俺がキョトンとしていると、先生は昨日のプリントを出して来て、『さあ、これから教えてほしい?』と言うではないか。そして一から十までゆっくりていねいに教えてくれた。おかげで数学の授業が楽しくなった」

この松山君が、ラーメン屋のアルバイトに週四日程度通い出し、「まだまだ、注意されることも多いけど、これからは続けられそうである。これからは、学校とアルバイトと、頑張っていけそうに思う」と結んでいます。

風ひらひらと学校へ来る

ニッカボッカみながはいてるからかつこい

風ひらひらと学校へ来る

小林英二

知的な障害があり、他人とのコミュニケーションをとるのが難しい生徒です。そのため

仕事には就けていませんが、毎日休まず学校に来ます。

この歌は、三句まではすらすらとかけましたが、四句めで鉛筆が止まってしまいました。「ニッカボッカのズボンでどんなふうに学校へ来るの?」と聞くと、長い沈黙の末に、「風ひらひらやねえ」と答えてくれました。この時の彼は三年生でしたが、一年生の時の歌「ぼくはらくなとかながえることしかかんがえてみませんまほの力でつけるんをよく神さまゆことときく」から、二年を経てこのように詠めるようになり、職員室へ帰ると、教師みなが「いいなあ」と嬉しい気持ちになりました。

仕事に就けない小林君が、ニッカボッカへのあこがれを持てるほど、夜間定時制高校での作業着は日常の風景としてとけこんでおり、まわりの生徒たちも、そんな彼に冗談口調で「小林!今日の仕事はどうだった」と声をかけることもしばしばで「しんどかった」などと答えていました。

小林君のことでは、二年生の秋の出来事が忘れられません。

「〇〇が僕をいじめる」と言っては泣きじやくり授業どころではありません。お母さんによれば、テレビドラマでのいじめ事件を見てから、小・中学校時代にいじめられたことを思い出し泣いているとのこと、不安定

な状態が数日間続きました。

ちょうど十月二十七日の四時限の国語の授業でした。ぐずぐず泣いている小林君に、測量の仕事で働く橋口君が怒って言いました。

「小林、いい加減に泣きやめろ、お前は定時制に来て幸せやないか、俺の弟は知恵遅れでも言えないし中学校の障害児学級出て行く所ないので家にいる。いつまでも甘えて泣くな」

橋口君が、障害を持つ弟の話題を口にしたのは初めてです。小林君ははっとして聞き入っていました。そのままだ泣き止んでしまったのです。

ところが不思議なことに、それ以来小林君が泣くということは一度もありません。

ジャッキアップの歌

手に負えへん崩壊家屋数えきれん

ジャッキアップしまくりまだ五〇軒

上野 義弘

震災後の神戸の町で、傾いた民家をジャッキアップ工法で修復する仕事のようすです。阪神・淡路大震災による全半壊の家屋数は、約四〇万戸というぼう大な数になります。中には、傾いた家を持ち上げ、基礎の土台をやり直し、壁、柱、サッシ、屋根などを修理し

た者たちが蘇る不思議な力を秘めた場所です。他人の何倍もの努力を要する、この働き学ぶという営みは、夜間定時制高校生たちのかけがえのない貴重な財産です。

ところが、この十年来教育行政は、「働きながら学ぶための定時制高校の役割は終わった」と言い、教育の多様化(高校中退生、不登校生、生涯学習等)と少子化などに対応できる新しい高校としての「単位制高校」の設置を全国的に進めてきました。すでに全国で百十数校にも上ります。開校に伴い、経済効率を理由として近隣の定時制高校が廃校にされている例が多くあります。

「単位制高校」はその多くが午前・午後・夜間の三部制で最短三年で卒業できるものです。ところが、東京の新宿山吹高校や大阪の中央高校に見られるように、成績の良い生徒たちが集中して競争率も高く、多くの不合格者を出していることから見て、先に短歌を詠んでいるような生徒たち、定時制高校であるからこそ学ぶことができる生徒たちのほとんどは、入学できない仕組みになっているのです。それは、障害者、病弱者、高齢者・荒れている生徒、海外引き揚げ生徒や外国籍生徒などの、社会的弱者たちなのです。

定時制高校は入学生徒数が減って効率が悪いといわれますが、生徒数が減少したからこそ、社会的に弱い立場の人々が入学できるよ

うになったとも言えるのです。けれども、東京都では「チャレンジスクール」という新しい形の単位制高校を一学区に一校設置して、定時制を四校規模で廃校するといったような動きがあります。

兵庫県教育委員会は、東京・大阪に倣って二〇〇一年をめどに、西宮市立西宮西高校(定時制)を県立の「単位制高校」として建て替え、それに併せて近隣の定時制高校五校を廃校にする計画を明らかにしました。このため、県立尼崎南高校、同良元分校、尼崎市立城内高校、県立東神戸高校の四校で卒業生や在校生、親たちを中心とした「存続を求める会」が結成され、短期間で三万人余りの署名を集めるなどの廃校反対運動が起こっています。こうした運動の結果、九八年一月四日公式発表があり、城内、良元分校の存続は決まりましたが、県立の尼崎南、武庫、東神戸高校三校は募集停止になりました。

許せない定時制高校つづし

尼崎南高校、同良元分校は、県内では稀な知的障害生徒を受け入れ卒業させてきた実績を持つ学校です。ダウン症の玉置篤史君や筋ジス(脊椎性筋萎縮症)の寺脇論君もそうした生徒たちです。

寺脇君は卒業式を二カ月後に控えて亡くな

りましたが、卒業式で代表の生徒が「あなたが教室で一生懸命に一文字一文字でいねいきつい姿勢でノートしていた姿を心のアルバムに残しておきます」と述べているように、彼らは定時制の場で受け入れられて来たのです。ところが、こうした取り組みを、警察の力を借りてまで潰そうとしているのが、昨年同高校兼良元分校の校長に赴任した佐野駿介氏です。

全日制高校の教頭を経て新校長になった佐野氏は、昨年今年と知的障害者を不合格にしました。四月、話し合いに訪れた障害児、親、教師たちに対し、青ざめた表情で声を荒げ、あらかじめ予定していたかのごとく退去命令を読み上げ、約三〇名余りの制服警官を導入して話し合いを拒否しました。そして、卒業した障害生徒と親の前で、「本来は入学が認められない生徒、高等学校はある程度の知的レベルが必要」とまで言つてのけました。

九〇年一月神戸高塚高校での女子生徒校門圧死事件、九七年五月の須磨区の児童殺害事件など兵庫県、とくに神戸市にあっては全国的に異常な事件が目立ちます。

そして、神戸市の不登校生徒の高い割合や体罰事件の件数虚偽報告などの新聞記事を持ち出すまでもなく、依然として生徒を暴力支配する風潮があり、佐野校長に象徴される障

害者排除、定時制高校蔑視の思想は定時制統合の姿勢に通じているものがあり、兵庫県教育の行く末を暗澹としたものになっているのです。

尼崎南高校を四年かけて卒業したダウン症の玉置篤史君の母の言葉です。

「尼崎南高校は、篤史を含めて何人かの障害を持った人達には、自信を持つて居れる場所でした。篤史のそのまを受け入れてくれた場所だったと思います。小・中と登校できなかった篤史が病氣以外は休む事なく通うことができた場所です。そうした事も知ろうとせず、話し合いに応じる事もなく、警察を呼ぶという事に対しては、篤史の四年間や、付き合ってくれていた生徒さんたちをも否定する事になるのではありませんか！」

こうしてみると定時制高校と、そこでけんめいに生きる生徒たちにこそ、危機的状況にあるとされる現在の教育問題を打開する糸口があるように思えてなりません。

だからこそ、定時制高校をなくすことは許せないのです。

後記

県下各地で定時制統廃合反対運動がとりくまれています。障害者をはじめとした就学困難な人々に門戸を広げてきた学校をつぶす策動への抵抗運動が続けられています。これらの運動に対して、この間「日の丸・君が代」法制化に向けて厳しい弾圧を受けている広島から、多くの支援、励ましが寄せられています。

この三月末、原告らを市芦に復帰させられるのか。当局のリストラが強行される中で状況は厳しいですが、ねばり強く闘うしかありません。一層のご支援をお願いいたします。

△追伸△この紙面をかりて皆様方に謹んで報告いたします。長い独身生活を続けてきた深沢さんがついに結婚しました。御相手は若き弁護士で、昨年末に電撃的入籍をされました。

今年早々に開かれたお祝いのパーティーでは、全港湾の中村氏が乾杯の音頭をとられ、「長い闘争をしてると一つぐらい良いこともあるわな」と驚きを隠せぬ挨拶があり、「密やかな愛」をめぐり「糾弾」と「祝福」の入り混ざった楽しい雰囲気で大盛況でした。

お二人の末永き幸福をお祈りし、闘争勝利に向けて力強い歩みを踏み出しましょう。